

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 映像学

試験科目 論述問題科目

以下の問1と問2の両方に答えてください。解答用紙のスペースが足りない場合は、裏に書いてもかまいません。

問1

以下の(1)～(3)のうち、2つを選んで、それぞれ10～15行の範囲内で、日本語または英語で解答してください。例に挙げる作品や理論はこの国・地域のものでも構いません。

- (1) 映画と観客の関係はどのように考えられるでしょうか。1人の理論家の理論を例に挙げ、その理論の要点をわかりやすく説明してください。
- (2) 歴史的に考えて、検閲は映画の表象にどのような影響をもたらしてきたでしょうか。映画史上重要と思われる映画作品を一つ例に挙げ、いつどこどのような検閲がその作品の表象にどのような影響を与えたと考えられるかを説明してください。
- (3) 映像作品において音はどのような役割を果たしているでしょうか。作品を一つ例に挙げて、その作品における音の機能の特徴を具体的に説明してください。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 映像学

試験科目 英訳読解問題科目

問2

次の英文は、Oliver Gaycken, *Devices of Curiosity: Early Cinema & Popular Science* (Oxford: Oxford University Press, 2015), pp. 3-4 (脚注は省略) からの抜粋である。これを読んで続く問いに日本語または英語で答えてください。

The first public screening of the Lumière cinematograph took place on December 28, 1895, at the Salon Indien, in the basement of the Grand Café on the Boulevard des Capucines in Paris. After this screening Georges Méliès was said to have approached Antoine Lumière, father to Auguste and Louis and the evening's impresario, to ask whether he could purchase a cinematograph. Antoine replied, "Young man, my invention is not for sale. . . . For you it would be ruinous. It may be exploited for a while as a scientific curiosity; beyond that it has no commercial future."⁴ The obvious irony here is that Lumière père was mistaken; the cinema, after all, had an extraordinarily robust commercial future. As interesting as this lack of appreciation for the cinema's potential as an entertainment device, however, is the description of it as a "scientific curiosity," a designation that invokes a lineage of optical toys, such *jouets philosophiques* as the thaumatrope, the phenakistiscope, and the zoetrope, which also included the deployment of chronophotography in physiology.

Cinema's initial debt to this imaging tradition has received substantial attention.⁵ One influential account describes scientific cinema as "a mode geared to the temporal and spatial decomposition and reconfiguration of bodies as dynamic fields of action in need of regulation and control," thus emphasizing the scientific film's place among techniques for social regulation.⁶ The question of how scientific modes of visualization have figured in cinema history beyond the experimental achievements of the medium's pioneers has been largely ignored, however. The cinema's indisputable involvement with a disciplining gaze is only part of the story of the interaction of cinema and science. A different type of gaze emerges by considering the fluid boundaries between science and entertainment in the culture of modernity and modernization, which I designate with the strategically multivalent keyword "curiosity."

Curiosity is a capacious concept. There are sexual and scientific curiosities as well as a generalized form that inheres in all narrative—the question "what happens next" that propels stories forward. In an evolutionary sense, curiosity can be seen a core human characteristic.⁷ Curiosity is also a capricious concept. Historically, the term has transformed from a sin to a virtue, a spectrum of meaning that is retained in common usages that are antithetical, such as "morbid curiosity" versus "intellectual curiosity."⁸ My own use of the term is indebted to Hans Blumenberg's argument that curiosity is a signal characteristic of modernity.⁹ Blumenberg's periodization of modernity goes back well beyond the nineteenth century; in his account, curiosity distinguishes the modern from the medieval.¹⁰ Curiosity thus functions as a shifter, designating the novelty of the popular-science film's emergence from the knowledge cultures of the late nineteenth century while also recognizing links to traditions that extend much farther back, such as the cabinet of curiosities, helping to account for how early popular-science films are simultaneously modern and venerable.

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 映像学

試験科目 英文読解問題科目

Curiosity also deemphasizes objectivity as a preeminent principle for understanding popular-science films. While Lorraine Daston and Peter Galison trace how objectivity came to be installed as a “ubiquitous and irresistible” epistemic virtue around 1850, they also acknowledge that objectivity’s enthronement was far from a monolithic occurrence, consisting instead of “innovation and proliferation rather than monarchic succession. . . . This is not some neat Hegelian arithmetic of thesis plus antithesis equals synthesis, but a far messier situation in which all the elements continue in play and in interaction with one another.”¹¹ Thus, this argument expands on Daston’s and Galison’s observation that the rise of objectivity did not eradicate other epistemic forms. So while many practitioners of science were turning away from the kinds of thinking and expression that characterized popularization and the fluidity of the cultures of art and science prior to the mid-nineteenth century, a prominent site for the cultivation of curiosity in modernity was the domain of popular science. Instead of objectivity’s restraint, nineteenth-century popular science retained ties to previous traditions of display and their engagement with the senses and the affective states of curiosity and wonder.

The “devices” of curiosity in the book’s title, then, refer on the one hand to material contrivances—the machines, films, and the exhibition spaces that constitute the range of physical artifacts related to popular-science films. Devices encompass less tangible manifestations as well, however, such as the cinema’s ability to visualize the invisible and provide a form of enriched vision. In this sense, the devices refer to the various techniques for producing novelty and revelation that include slow motion, magnification, or time lapse (which are certainly entwined with physical artifacts). Finally, devices also can be thought of as akin to literary devices. In this sense, to call these films “devices of curiosity” is to suggest that they function as contrivances of the concept of curiosity itself, that they are curious experiences that invigorate the senses and activate the sense of wonder. The devices of curiosity in this sense are stimuli for knowledge, products of and for epistemophilia.¹²

- (1) アントワーヌ・リュミエール (Antoine Lumière) が ジョルジュ・メリエス (Georges Méliès) に語ったとされる言葉を冒頭で引用する意義を著者はどのように説明しているか。自分の言葉でわかりやすく説明してください。
- (2) 文中の「a different type of gaze」とはどのように理解できるか。何に対して different なのかを明記した上で、わかりやすく説明してください。
- (3) 著者がハンス・ブルーメンベルグ (Hans Blumenberg) の論に依拠しながら定義する好奇心「curiosity」の意味は、一般的な意味とどのように違うか。著者がまとめる一般的な意味を定義した上で、わかりやすく説明してください。
- (4) 著者が 19 世紀の通俗的科学観における感覚や情動の位置付けを説明するにあたって Lorraine Daston と Peter Galison の論を引用する目的は何でしょう。Lorraine Daston と Peter Galison の論を説明した上で、わかりやすく答えてください。

【解答にあたっての注意】

- ◆ 専門試験は、次の2つからなる。
 - (1) 日本文化学に関する文献解読
問1（日本近現代文化・文学） 問2（表象文化） 問3（日本文化史）
 - (2) 日本文化学に関する論述問題
問1（日本近現代文化・文学） 問2（表象文化） 問3（日本文化史）
- ◆ 「文献解読」の問1～問3より、自身の研究分野に最も近い領域の問 1つ を選んで解答すること。
- ◆ 「論述問題」の問1～問3より、自身の研究分野に最も近い領域の問 1つ を選んで解答すること。
- ◆ 「文献解読」と「論述問題」は、同じ領域の問題を選択すること。たとえば「文献解読」で（表象文化）を選んだ場合には、「論述問題」でも（表象文化）を選ばなければならない。
- ◆ 解答は「文献解読」「論述問題」に分け、それぞれの答案用紙を用いること。解答スペースが足りない場合は、答案用紙の裏に記述してもよい。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文化学

試験科目 日本文学に関する
文献解説 科目

問 1 (日本近現代文化・文学)

次の文章は三浦玲一『村上春樹とポストモダン・ジャパン』（彩流社、2014）の
一部である。[1] [2] について答えなさい。

[1] この文章の主旨を、5 行程度で要約しなさい。

[2] この文章について、以下からキーワードを一つ以上選択し、批判的に論
じなさい。首尾一貫した論述を行うこと。

グローバル化 原典主義 ポピュラー・カルチャー 受容 誤読 主題

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Web
ページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載するこ
ととします。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人 文 学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文化学

試験科目 日本文学に関する
文献解説 科目

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Webページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文化学

試験科目 日本文学に関する
文献解読 科目

問2（表象文化）

次の詩を評釈しなさい。

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Webページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文学

試験科目 日本文学に関する
文献解説 科目

問3（日本文化史）

次の「和食」に関する 2 つの文（和文・英文）を読み、続く問いに日本語または英語で答えなさい。

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Webページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人 文 学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文化学

試験科目 日本文学に関する
文献解読 科目

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Webページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

問い

- ① どちらか1つの文章を選び、その趣意を、もう一方の言語で要約しなさい(日本語 5 行程度・英語 200～300 ワード)。
- ② 2つの文章を比較し、相違点を 3 つ以上一覽にまとめなさい。
- ③ 問い②で指摘した齟齬のもつ、日本文化を研究する上での意義を論じなさい(日本語 5 行程度・英語 200～300 ワード)。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 日本文化学

試験科目 日本文学に関する
論述問題 科目

問1 (日本近現代文化・文学)

次の [1] [2] について答えなさい。

[1] 近現代の文学を考える際に、時代区分や暦、時間についての感覚など、時間に着目することにより、どのようなことが考察できるか。具体的な事例・作品を挙げて、10 行程度で具体的に論述しなさい。

[2] 次に掲げた事項についてそれぞれ知るところを述べなさい。解答する事項の記号を各々必ず記すこと。

- a. 北村透谷
- b. 村上龍
- c. 『青鞥』
- d. キャノン (正典)

問2 (表象文化)

日本文化における神の表象について他文化と比較しつつ論じなさい。

問3 (日本文化史)

近現代日本に関する人文学研究における重要な最近の学術的動向として「物質文化」が注目されている。具体的な研究者名、作品などを例に挙げ、近現代日本に関する理解を深めるうえで、それらのトレンドがもつ意義を日本語または英語で論じなさい（日本語 10 行程度・英語 500～600 ワード）。

大学院入学試験問題
(一般入試・社会人入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 文化動態学

試験科目 科目

次の4問の中から、自分の研究計画に関連の深い2問を選んで解答しなさい。解答は下記の「解答上の注意」に基づいて書きなさい。

解答上の注意

- ① 解答は1問につき答案用紙1枚以内で書きなさい。
- ② 答案用紙には受験番号および選択した問題番号を書きなさい。
- ③ 同一の答案用紙に複数の問題の解答を書いてはいけません。また答案用紙の裏面を使ってもはいけません。

問題1 文化相対主義 (cultural relativism) という概念ないし態度について、まず、その要点を定義的に説明しなさい。次に、文化相対主義を具体的事例に利用して、そうして得られる考察結果の長所、問題点、あるいはその両面を論じなさい。

問題2 世界の言語には、文字や表記法を変更したものがいくつかある。文字や表記法の変化は、言語文化に対してどのような影響を与えるか具体例をあげて論じなさい。

例えば、トルコ語は、20世紀前半にアラビア文字の使用を止め、ラテン文字を採用し現在に至っている。モンゴル語は、20世紀中ごろ、キリル文字を採用。その他、ハングルと漢字の関係、日本語の新旧仮名遣いなど。

問題3 人種主義 (racism) とは、「生物学的差異」に基づいて人間を分類し優劣づける差別的な思想、行為、政策を指すと一般に理解されている。しかし人種主義をもっと広く捉え、異質性嫌悪 (heterophobia)、つまり自分と異なる差異を持った他者に対する不安や差別的態度と関連づけて理解する立場もある。この後者の立場からすると、人種主義は、例えば性的少数者や障がい者に対する差別とも共通点を持つことになる。

人種主義と、性的少数者や障がい者あるいは他のカテゴリーに対する差別的な思想や態度との間には、共通点があると言えるだろうか。具体的な例を挙げながら、論じなさい。

問題4 「大衆文化」、「民衆文化」、「ポピュラー・カルチャー」、「ポップ・カルチャー」などの用語は、元来ハイ・カルチャーとの比較によって作られた語だったが、現在その区別はあいまいになっている。以上に挙げた文化を示す用語を1つ取り上げ定義し、現在においてどのような具体例と対応するかを説明しなさい。

大学院入学試験問題
(一般入試)

人文学 専攻

問題種別 専門試験

分野・専門 ジェンダー学

下記の問 1～4 のうち、2 問を選択して解答しなさい。なお、解答は下記の「解答上の注意」にもとづいて書きなさい。

【解答上の注意】

- ① 解答は、序論・本論・結論の構成で書き、序論には主題 (Thesis Statement) を含めること。
- ② 解答は 1 問につき答案用紙 1 枚を使用すること。
- ③ 答案用紙には受験番号、選択した問題番号を書くこと。
- ④ スペースが足りない場合は、裏面を使用しても構わない。

問 1

以下の引用文で指摘されているように、子ども向けの物語が、男の子向け、女の子向けに分けられていることは、子どもの成長にどのような影響を与えていると考えられるか、あなたの考えを述べなさい。

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に該当する箇所については、本Webページでの公衆送付について著作権者により許諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

出典：斎藤美奈子(2001)『紅一点論』ちくま文庫、pp.13-14

問 2

大手化粧品メーカーの資生堂 (SHISEIDO) は、同社の約 1 万人の美容部員*に対し、2014 年春から育児中でも夜間までの遅番や土日勤務に入ってもらおうことを決定した。女性が圧倒的多数を占める美容部員へのこうした措置は、同社が擁する国内従業員 2 万人超のうち 8 割以上が女性であること、また (同社が) 「女性に優しい会社」として知られていたこともあり、「資生堂ショック」として様々に論じられた。この措置に対するあなたの考えを述べなさい。

* 「ビューティーコンサルタント (Beauty Consultants) 」と呼ばれ、百貨店などで顧客に対してカウンセリング等を行い、適した化粧品を提案・販売するのが主な職務。

問3

他者に対して寛容な心を持ち、多様性を互いに尊重しあう社会を構築することの意義とは何か。セクシュアル・マイノリティの受容を例に挙げ、説明しなさい。

問4

スマートフォンが普及し10年ほど経た今日、スマートフォンは子育ての中にも浸透しつつあり、「育児の中で、幼い子どもにスマートフォンを渡して使わせる」ことは「スマホ育児」あるいは「スマ放置」とも呼ばれ批判されている。日本小児科医会は「スマホに子守りをさせないで!」と書いたリーフレット*を配布し、スマホ育児の負の効果について強調した。他方、スマートフォンを使用することのメリットを主張するスマートフォン許容論も同時に存在している。スマートフォンと育児の関係についてジェンダー的観点からあなたの考えを述べなさい。

* 日本小児科医会HP : http://www.jpa-web.org/dcms_media/other/smh_leaflet.pdf